# 見　学　会

田　島　美　香

4月6日朝，期待と不安が入り混じった気持ちで大月駅に降りた。初めての見学会参加。その上御一緒するのは案内役の都留文科大学の和田明子先生をはじめ，諸方面で活躍される先輩方ばかりである。大学院1年生の私としては，こういった先輩方とお話ができるまたとない機会だ，と思い参加したのであるが，目的地に近づくにつれ自分一人場違いではないかと思ったりもした。

大月から富士急で約30分。富士山の麓，西桂町が今回の見学会の目的地である。昔からこの辺りは絹織物の生産がさかんな所で，今回の目的も，その絹織物の工場見学にあった。

集合場所三ツ峠駅に到着。天気はどんよりとした曇り空。今にも雨が降りそうであった。まずは駅前の商工会館で，町長さん，西桂織物工業組合の事務局長さんに話を聞いた。西桂町は，面積15.5㎢そのうち70％は山で，残りの30％に総人口4,589人のほとんどが住む山あいの町である。（平成3年4月1日現在）。この地で絹織物業が行われるようになったのは江戸時代，寛永年間のことで，郡内かいき，といって，江戸では袴地として人気が高かったそうだ。明治の中頃になって，郡のバックアップがつくと，生産量も伸びはじめ戦前に最盛期を迎える。この頃は主に洋服のそで裏地が作られ，朝鮮に輸出もされていたそうである。第二次大戦中は軍需産業のあおりで生産量は40％に抑えられていたが，戦後生産も正常化し，町の基幹産業となっていき，現在に至る。最近，絹織物産業の低迷がよく言われている。よく考えてみれば和服は着ないし，洋服にしても，たんすをのぞけば合成繊維の服が多い。シルクの需要が低くなっているのは確かである。従ってこの西桂町も，例に漏れず生産量，従業者数共減少傾向にある。しかしながら，その率は周辺の都留市などから比べると低い。それは多品種少産から単品種多産，特にネクタイ，スカーフ，マフラーなど将来性の高いものに転換を計ってきたからである。また新製品，新素材の開発が盛んで，まだ巷に出回っていない揚柳座布団（夏向けしわ加工），麻100％の斜織ネクタイ等をみせていただいた。こういった開発が若手育成に役立つそうだ。やはり時代の波に合わせて早期に転換をはかったことが，現在良い方向へ進んで行っているのだろう。最後に事務局長さんが，「産地として定着するには，様々な関連企業が集まってこなければならない」とおっしゃっていたが，これから関連企業を誘致し織物の町としての名を広めていこうとする意気込みがうかがわれた。

昼休憩の後，工場見学へ向かった。まずは座布団カバーの工場。織物工場を見学するのは初めてであったが，自動織機のためか振動がひどく二階に上がると気持ちが悪くなるくらいであった。しかし，少しずつ模様が出来上がっていくのを見ていると面白くていつのまにか振動も忘れ見入ってしまった。次にネクタイの生地を織る工場へ行った。中に入ってまずびっくりしたのは玄関入ってすぐの所に飾られていた絵である。一見したところ普通の絵なのであるが，近づいてよく見ると織物なのである。とても布には見えない。中に入ると先ほどの座布団工場と違い，置いてある糸の種類が豊富で，とてもカラフルであった。

ネクタイ工場へ行くあたりからポツポツ降り出した雨が，商工会館に戻る頃には本降りになってきた。会館では，テーブルに様々なネクタイ，スカーフ，マフラーなどが用意されていた。とても安い値段で売って下さるという。中には洋がさというなんとタイムリーな商品も置かれていた。この町では洋がさの生地も生産しているそうだ。みなさんこの時間が一番目が輝いていたように見えたのは気のせいだろうか。かく言う私もはじめの不安はどこへやら，選ぶのに夢中になっていた。

初めての見学会は楽しくまたためになるものであった。機会があったらまた参加してみたいと思っている。（39回生）